



中江藤樹生誕400年記念市民劇  
「藤の樹と風と」で

■表紙の写真

昨年の12月に実行委員会を立ち上げ、多くの市民有志キャストにより5か月間に及ぶ稽古を続けてきた中江藤樹生誕400年記念市民劇。400年祭のメイン事業のひとつとして、9月21日(日)藤樹の里文化芸術会館で昼・夜の2公演が行われ、延べ1,000人を超える観客が詰めかけました。「心を磨き、人を愛し、人としての道」を説いた藤樹先生の短くも激しい生涯を描き、たくさんの人々の「思い」が詰まった市民劇は、静かな感動を呼び、観客の心を潤しました。



- 2-5 お知らせ拡大版
- 6・7 みんなで子育て、親育ち！  
地域で子育て、親育て！
- 8 いきいき元気生活
- 9 防災・消防情報
- 10-15 情報お知らせ版
- 16 警察・交通事故発生状況・消費生活相談
- 17 文化情報
- 18 人権を考える、藤樹先生の逸話

シリーズ  
**人権**を考える  
パート②

いくつになっても人生の「主役」  
～高齢者の人権～



社会参加と  
世代を超えた交流を

人は誰でも、年齢を重ねやがて高齢者の仲間入りをします。一般的には65歳以上が高齢者といわれますが、高齢者のイメージは年々変化し、80歳、90歳になっても、人生の目標に向かって生き生きと活躍している人たちがたくさんおられます。高齢になっても、自分の知識や経験、技能を活かした仕事にいたり、さまざまな社会活動に参加したり、趣味を楽しむなど、いくつになっても生きがいを持って生活する積極的な姿勢が大切です。

人が歳をとることは、さびしいことではありません。高齢者は長い道のりを歩んでこられた経験と知恵を豊富に持つておられ、若い世代とのふれあいを通じ、次代に引き継がれなくてはならないものです。世代間の交流は、他の時代の考え方や生き方を理解しあうことや、お互いを尊重する気持ち、大切に思う気持ちを育むことにつながります。若い世代の人たちは、私たちの社会

を築き上げてきた人生の先輩に対し敬愛の気持ちを持ち接することが大切です。

人権と介護

しかし、一方で高齢による身体的な機能の低下や病氣、認知症などで、介護を必要とする人も多くなっています。介護が必要になってくると、生きがいや失ったり、社会から疎外されているような気持ちになる人もおられます。

高齢者がこのような気持ちになることなく、人間としての尊厳を保つためには、周りの人の理解と配慮が必要です。ところが、近年、高齢者に対して、言葉の暴力や無視、身体的暴力、介護等の拒否、財産の不当な処分等の「虐待」が起こっており深刻化しています。このような虐待から高齢者の人権を守るため、平成18年4月から「高齢者虐待防止法」が施行されています。また、判断能力の低下や高齢であるという弱みにつけ込まれ、財産の不当な処分や悪質商法などの被害に遭うことがないよう、周囲の人の支援と「成年後

見制度」などの活用が必要となつていきます。

介護が必要になつても、できる限り自立し人としての尊厳を失わず生活できることはだれもが願っていることです。介護される人の意志を尊重し思いやりをもって接することが大切です。

同時に介護する人の人権も護られなければなりません。ゆとりをもって介護をするためにも、それぞれにあった介護サービスを活用することは大切なことです。

日本の高齢化は急速に進んでいます。2015年(平成27年)には65歳以上の人口の割合は、26パーセントになると予測(総務省統計局による)されています。

今を生きる私たちは、この問題と正面向き向き合い考える必要があるのではないのでしょうか。

岡高島市人権施策課  
☎(25)85254  
FAX(25)81020

藤樹先生の逸話⑦

「淀ばなし」

藤樹先生が会座にのぞまれた時、もしその座中に、落ち着きのない武士がいて雑談におよんでいたら、先生は必ず「淀ばなしになつてしまった。これは私の望んでいるところではない。私は年貢をはかってくる。」  
と云って席を立ち、隣の部屋であるいは書物に向かい静座をしました。

門人たちは、これによって大いに恥じり、勉勵のこころざしを奮い立たせました。これは、先生の会座におけるいましめであります。

「解説」

「淀ばなし」とは、淀川の川船の乗合せ客が、取り留めもない雑談を終始していることをさしている。書院での先生は、一方的な講義方式でなく、当時としては斬新な「講習討論」を採用しました。